

【報告要旨】

ドレフュス事件からみる「ユダヤ」と「文学」

鈴木 重周

はじめに

本報告は、十九世紀末フランスにおける反ユダヤ主義とユダヤ系フランス人作家との関係を研究課題とする報告者が、近代ヨーロッパ史上最大の反ユダヤ主義事件であるドレフュス事件（1894-1906）に着目し、フランスにおける「ユダヤ」と「文学」をめぐるさまざまな状況の一端を明らかにしようとするものである。同時に、「文学研究・文化研究の方法とグローバル展開を探る」という本プロジェクトの趣旨に沿って、報告者自身のこれまでの研究の新たな可能性を、多様な専門をもつ研究者の前で発表することによって見出そうとする試みである。なお、本報告は、報告者がこれまで行った研究とその成果（稿末に記載）に基づくものであることをお断りしておく。

1. フランスにおける「ユダヤ文学」の諸相

1. 1. 「ユダヤ文学」とは

「ユダヤ文学」という語を一言で説明することは難しい。通常、「日本文学」、「英文学」、「フランス文学」という場合、それは作者の国籍あるいはテキストの執筆言語を基準としている。一方、「ユダヤ」が示すのは国籍でも言語でもない。「ユダヤ文学」を定義することは、そのまま「ユダヤ人」とは誰なのかを指し示すことと同じ困難と危険性をはらむものなのである。

1. 2. サミュエルズの定義

イエール大学のモーリス・サミュエルズは著書『イスラエリート
の創出』において、フランスにおける「ユダヤ文学」を「ユダヤ人によって、フランス語で、ユダヤ人であることを主題として

書かれたもの」と定義している (Samuels 2010:p.3, note7)。この定義によってサミュエルズは、これまでフランス文学史においてほとんど知られていなかった作家ウジェニー・フォア (Eugénie Foa, 1792-1852) を、「フランス語で小説を書いた最初のユダヤ人であり、いかなる言語であれ小説を書いた最初のユダヤ人女性」 (Samuels 2016:p. 12) として取り上げる。十九世紀前半の七月王政期に大衆向けのメロドラマというジャンルで活動したフォアは、ユダヤ人女性とキリスト教徒男性との悲恋を描いた。彼女自身は後にカトリックへと改宗し、「ユダヤ人であることを主題」とするテキストは書かなくなってしまうが、それでも、職業作家としてのフォアが、おそらくは読者の需要に応じて「異教徒間の恋愛」をテーマとしていたことは重要である。

1. 3. マリノヴィッチが着目する作家たち

歴史学者ナディア・マリノヴィッチは、フランスにおいてなおも根強い反ユダヤ主義が顕在化した十九世紀末のドレフュス事件期に青年期を迎えていたアンドレ・スピール (André Spire, 1868-1966) やエドモン・フレグ (Edmond Fleg, 1874-1963) らによって、文学テキストに「ユダヤ的テーマ」 (反ユダヤ主義との対決、フランス社会への同化、異教徒との婚姻) が再び表れるようになることを指摘している (Malinovich 2008:p.36)。この動きを、革命政府によるユダヤ教徒への市民権付与 (1790-1791)、すなわち解放後の第一世代であるフォアたちの再現として位置づけることもできるだろう。

1. 4. 「ショアー後」の作家たち

今日、フランスにおけるユダヤ人と文学との関わりをテーマとする研究の多くは、第二次世界大戦後に活動したユダヤ人作家について論じている。クララ・レヴィーは、ジョルジュ・ペレック (Georges Perec, 1936-1982、ポーランド移民の両親のもとパリ生まれ)、ロマン・ガリ (Romain Gary, 1914-1980、モスクワ生まれ)、アルベール・メンミ (Albert Memmi, 1920-、チュニス生まれ)、アルベール・コーエン (Albert Cohen, 1895-1981、オスマン・トルコ領コルフ島生まれ、後にスイス国籍取得) そしてエドモン・ジャベス (Edmond Jabès, 1912-1992、カイロ生まれ) ら、国籍も出生地も異なる 5 人のユダヤ系作家たちを「ショアー」 (ヘブライ

語で「大災厄」、現在のフランス語においてはナチス・ドイツによるユダヤ人絶滅作戦を表す)の経験と、文学テクストの執筆にフランス語という言葉を選択したという二つの共通項によって「ショアー後のユダヤ人作家たち」とカテゴライズしている(Lévy 1998)。

2. ドレフュス事件をいかに描くか

——マルセル・シュウオブ『少年十字軍』を読む

2. 1. 裏切り者のユダヤ人ドレフュス

フランス革命によって他のヨーロッパ諸国に先駆けてユダヤ教徒を「解放」した共和国フランスで、突如として反ユダヤ主義が顕在化したのが、陸軍参謀本部におけるユダヤ系将校アルフレッド・ドレフュス(Alfred Dreyfus, 1859-1935)のスパイ行為をめぐる冤罪事件として知られるドレフュス事件であった。

1895年1月5日の軍籍剥奪式で公衆の面前でサーベルを折られるドレフュスを描いた『プチ・ジュールナル・イリュストレ』(*Le petit journal illustré*)紙(1895年1月13日号)の挿画は、今日、世界中で知られている。また、右派論客たちが残した軍籍剥奪式のルポルタージュは、「裏切り者のユダヤ人」ドレフュスに対する冷酷な表象を現代に伝えている(モーリス・バレス「ユダのパレード」、レオン・ドーデ「懲罰」等)。ベル・エポック期のフランスでは、ドレフュスという一人の「ユダヤ人」をめぐる、メディアは連日、テクストとイメージによってこの「裏切り者」を表象し続けた。

2. 2. ユダヤ系作家シュウオブ

ここで本報告が取り上げるのが、フランス文学史において世紀末に数多現れた象徴派作家の一人として知られるマルセル・シュウオブ(Marcel Schwob, 1867-1905)が1896年に出版した中篇『少年十字軍』(*La Croisade des enfants*)である。シュウオブは、独仏国境地帯アルザスにルーツを持つ伝統的ユダヤ教徒の家系に生まれたが、彼自身は文学テクストにおいても私生活においても、自身のユダヤ性について沈黙を守り続けた。この、自身をユダヤ教共同体よりもフランス共和国に帰属させる意識は、解放か

ら三代目を迎えるユダヤ系フランス人に典型的なものであり、彼らは、やや侮蔑的なニュアンスを伴う「ユダヤ人」(Juifs)ではなく、宗教色の薄い「イスラエリート」(Israélites)を自称した。

2. 3. 史実としての少年十字軍

シュウオブがテクストの題材とした「少年十字軍」とは、1212年ごろ、ドイツ、フランス、イタリアなどヨーロッパ各地で、同時多発的に、子どもたちが聖地奪回のためにエルサレムへと出発したという事件である。その結末は悲惨なものであり、子どもたちが聖地にたどり着くことはなく、ある者は地中海で消息を絶ち、ある者はイスラム教徒の奴隷となり、帰国できたのはごくわずかだったと言う。

2. 4. 複数の語りの並置

シュウオブは、中世の歴史事件を文学テクストに再構成するにあたって、事件に関連する人物たちによる語りを並置するという手法と採用する。この手法はシュウオブの独創ではなく、彼が愛読していたイギリス文学、とりわけ詩人ロバート・ブラウニング(Robert Browning, 1812-1889)の『指輪と書物』(*The Ring and the Book*, 1868)から着想を得たものである。

2. 5. 語り手たち

シュウオブは、以下の語りによって物語を構成している。

第一の語り：放浪僧 (le Goliard)

第二の語り：癩者 (le lépreux)

第三の語り：教皇インノケンティウス三世 (le pape Innocent III)

第四の語り：三人の子どもたち (les trois petits enfants)

第五の語り：回船業者書記フランソワ・ロングジュー (François

Longuejoue, cleric)

第六の語り：イスラム僧 (le Kalandar)

第七の語り：幼いアリス (la petite Allys)

第八の語り：教皇グレゴリウス九世 (le pape Grégoire IX)

語り手たちの顔ぶれは、キリスト教徒（キリスト教世界の頂点である二人の教皇と最下層に位置する放浪僧、マルセイユで子どもたちを奴隷として売り渡す回船業者の書記、十字軍兵士の子どもたち）、イスラム教徒（イスラム僧）、異教徒（キリスト教の神に祈ることができない癩者）と宗教的に分類することができる。目撃者として、当事者として、語り手たちがそれぞれ「子どもたちの十字軍」について証言することによって、テキストは、「無垢なキリスト教徒の子どもたちがイスラムによって奴隷として売られた悲劇」という従来のキリスト教徒側からの解釈を揺るがしている。複数の語りから浮かび上がるのは、敵であるイスラム僧が子どもたちに向ける憐憫であり、同じキリスト教徒であるマルセイユの回船業者が子どもたちを売買する非道であり、指導者である教皇たちが何もできずただ神に祈る無力さである。

2. 6. 宗教的熱狂への警戒

ここで想起したいのが、シュウオブが『少年十字軍』を『ジュルナル』誌 (*Journal*) に発表していたのが 1895 年 2 月から 4 月だったという事実である。この時期は、アクチュアルな「宗教的熱狂」である反ユダヤ主義が爆発したドレフュス大尉の軍籍剥奪式 (1895 年 1 月 5 日) の直後であった。ヨーロッパの歴史において、社会が混乱すると最初に標的となるのはユダヤ人たちであった。事実、十字軍が組織されるたびに各地のユダヤ人居住区が略奪や暴行の対象となった。ドレフュス事件期、十九世紀末フランスでの反ユダヤ主義の爆発を目の当たりにして、ユダヤ系作家シュウオブが、十字軍とドレフュス事件に共通するキリスト教世界の宗教的熱狂に警戒心を募らせていたことは想像に難くない。

むすび

フランスにおける「ユダヤ文学」を考えると、その有りようは時代と社会状況によって様々である。革命による解放と、フランコ・ジュダイズムと呼ばれるホスト国への積極的な同化政策を経た第三世代のユダヤ系フランス人たちは、先行するフォアのよ

うな解放後第一世代とも「ショアー後」の作家たちとも異なっている。ドレフュスという、まさに第三世代のユダヤ系フランス人が反ユダヤ主義の標的となっているころ、同世代の作家シュウオブは『少年十字軍』で宗教的熱狂に警鐘を鳴らしていたと言えるだろう。公私にわたって自らのユダヤ性について声高に語ることの無かったシュウオブも、最後まで自分を陥れたフランス軍への復帰を切望したドレフュスも、共に共和国フランスの価値観を内面化した十九世紀末の典型的なユダヤ系フランス人なのである。

(終)

◇報告で言及した文献

Marcel Schwob, *La Croisade des enfants* (1896), dans *Œuvres*, Phébus, 2001, pp.478-503.

マルセル・シュウオブ『少年十字軍』多田智満子訳、王国社、1998年、120-163頁。

Clara Lévy, *Écriture de l'identité, les écrivains juifs après la Shoah*, PUF, 1998.

Nadia Malinovich, *French and Jewish: Culture and the Politics of Identity in Early Twentieth-Century France*, Littman, 2008.

——, *Heureux comme un Juif en France: Intégration, Identité, Culture, 1900-1932*, Honoré Champion, 2010.

Maurice Samuels, *Inventing the Israelite: Jewish Fiction in Nineteenth-Century France*, Stanford University Press, 2010.

——, *Les grands auteurs juifs de la littérature française au XIX^e siècle*, Hermann, 2016.

◇本報告のもととなった拙稿

鈴木重周、「世紀末のユダヤ系作家——マルセル・シュウオブ『少年十字軍』をめぐって」、『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、第90号、2007年、168-181頁。

——、「フランスにおける「ユダヤ文学」——ジッドの『日記』を手がかりとして」、『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、第112-113号、2018年、353-368頁。